

カリフォルニアの亡命作家（その１）
——パシフィック・パリセイズの文学者たち——

Die deutschsprachigen Exilliteraten in Kalifornien
——Die Literaten in Pacific Palisades——

浅野 洋

ASANO Hiroshi

カリフォルニアの亡命作家（その1） ——パシフィック・パリセイズの文学者たち——

Die deutschsprachigen Exilliteraten in Kalifornien ——Die Literaten in Pacific Palisades——

浅野 洋

ASANO Hiroshi

要旨：本稿では、1933年から1945年にかけてアメリカに亡命した作家をディアスポラとして捉えている。まずニューヨークでのドイツ人の亡命作家オスカー・マリア・グラーフとカリフォルニアに亡命したリオン・フォイトヴァンガーの亡命生活、抵抗運動、文学作品を対照し、特異性を明らかにすることで、アメリカに亡命したドイツ語作家全体を再構成しようとした。主に、アメリカへの適応、ドイツの反ファシズム勢力との関係、赤狩りへの対応、帰国の問題をテーマとして扱った。

キーワード：カリフォルニア、亡命作家、ナチス政権、ユダヤ人、ディアスポラ

「亡命とは情け容赦のない脱穀機である。ほこりは飛び散り、穀粒はそのままのこり、一粒の種が百粒になる」。（オスカー・マリア・グラーフ）

1. はじめに

カリフォルニアに亡命した作家、芸術家の活動、作品を再構成する意図をもって、「カリフォルニアの亡命作家」という題でフランクフルトの国立図書館（亡命部門）、アルバニー大学の亡命資料、南カリフォルニア大学のフォイトヴァンガー・コレクションに依拠しつつ、稿を重ねてみたい。扱う亡命作家、芸術家は、リオン・フォイトヴァンガー、トーマス・マン、ベルトルト・ブレヒト、フランツ・ヴェルフエル、フリッツ・ラング、チャップリン、アルノルト・シェー

ンベルクとなる予定。

2. オスカー・マリア・グラーフ——ニューヨークの亡命作家——

戦後も故郷バイエルンに帰ることなくニューヨークで生涯を閉じた亡命作家オスカー・マリア・グラーフは、ファシズムの時代には亡命者として反ファシズムの運動主体となって戦ったが、戦後になるととりまく環境は一変し、アメリカ自体が反ファシズムの思想家を疎んじ、赤狩りによって排除する姿勢に転じた。一方で戦後の西ドイツは反共産主義、反ソビエトの機運のなかで保守化の流れをつくった。

アメリカ、西ドイツをとりまく政治環境の変化は否応なく、故郷と亡命先を架橋しながら生きぬくという宿命を背負ったディアスポラであるグラーフを中間的な位置に追いやることになった。この亡命体験は、集合的な記憶のなかに収められるのではなく、個人の記憶の装置のなかに封印される状況となっていた。ディアスポラは本来、ヨーロッパ的な範疇での用い方としては、ある共通の言語、宗教をもつ少数民族、つまりユダヤ人が民族として根こそぎにされたあとにヨーロッパを追われ、国境を越えて離散している民を指すのが一般的であるが、この点についてエドワード・サイードはさらに敷衍させて、ディアスポラをユダヤ人的な故郷喪失として捉える必要はなく、亡命者、移民などが自らの本来の共同体の内外で、むしろ双方にまたがって生きていくコスモポリタンの意識をもつ民であると言っている。1933年以降、移民が大量に流入してきたニューヨークでは、移民社会、亡命者の共同体は、文化混交的、言語混交的な要素で充満していた。ヨーク街のドイツレストランに集うドイツ人は、政治的な立場も異質であり、利害も一致しない移民たちの、まさしく混淆した集合体であり、サイードに倣いこれもディアスポラと呼んで差支えないだろう。

民族の溜池、集合地となったニューヨークのメトロポリスにおいて、戦後はとくに西ドイツとの隔絶と亡命者間にある不協和音によってグラーフの孤絶感は助長されていった。グラーフは常連として、ヨーク街に毎週水曜日に集まるサークルを、その中心的な存在となって主催したわけだが、移民、亡命者のアメリカ社会への適応の度合いが高まるにつれて、その場の議論は空転し、影響力は衰えていった。この点に作家固有の語りの危機意識も生じることになり、コミュニケーションの不全を通り越して言語の危機、語ることの危機がたえず隣り合わせで潜んでいた。

ニューヨークでの29年間に及ぶ生活は大半が無国籍者として暮らした亡命生活であり、1958年

にようやく国籍を取得できたとはいえ、それはグラーフ自身がディアスポラとして異郷で生きていかざるをえない苦悩が刻まれた亡命生活であった。英語を解さないグラーフにとってマンハッタンのヨーク街の文化環境は、きわめて限局された生活空間であり、最終的には、作家にとっての言語の問題はあまりに大きく襲いかかり、それはかのクラウス・マンが英語で執筆して挫折した苦悩でもあった。シュテファン・ツヴァイクが亡命とは言語の問題であると喝破したことは、ヨーゼフ・ハーンがニューヨークでドイツ語を語ることをやめ、詩の言語としてのみ用いたことを想起させよう。ハーンの場合は、ドイツ語が殺人者の言語であるという強い贖罪意識にもとづいていたことも付記されるべきことだろう。それほどにディアスポラの環境は、読者の不在、出版社の無理解、西ドイツ側からの黙視、無視の姿勢、亡命者間のスパイ行為、アメリカ社会で増大する反共産主義感情などの要素が入り混じったものであった。アドルフはグラーフと同じく1938年にニューヨークに亡命し、「もはや故郷をもたない人間には、書くことが生きる住処となる」と亡命作家が生きる可能性について述べているが、グラーフの達した境地は「小さな、ささげられた瞬間を生きなくてはならないのだ」という諦念に似た心境であった。どこにも居場所のないディアスポラとしてニューヨークで生きるほかに術はなかった。戦後のアメリカ資本主義の急激な進展のなかで、しかもFBIの監視下にあったグラーフは、1958年のインタビューで次のように発言している。「この人びとにはさらなる発展というものはありません。かれらは真空のなかにはいっていくのです。かれらはもともと野蛮なアメリカ人に耐え、身をゆだねてもディアスポラのなかで暮らしているのです。もちろん私の運命もその運命から切りはなせるものではありません。凡庸さに甘んじなくてはなりません。それは私にもあてはまります。私は自分が天才であると想像したことはけっしてありません。したがって私も凡庸さと仲直りしたというわけです」。¹これがバイエルンのデカメロン、オスカー・マリア・グラーフの戦後風景であった。多くの亡命作家、知識人が、戦後は西ドイツに帰還し、適応と融合を繰り返したのと較べ、回想と執筆によって生き抜くことの困難さが語られていよう。ナチスの復興する西ドイツの保守主義に対する嫌悪、西ドイツ国民の小市民的な気質への蔑視とともに故国への帰還を拒否した亡命作家の結末であった。これはフォイトヴァンガーの東ドイツに帰還したブレヒトへの評価にも通じるものがある。ブレヒトの訃報を受けとったときのフォイトヴァンガーはブレヒトに託して己の心情をこう解説する。「ベルリンでは明日、ベルトルト・ブレヒトが埋葬される。国家行事とし

1 Georg Bollenbeck: Oskar Maria Graf, mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Reinbek bei Hamburg 1985, S. 132.

2 Klaus Modick, Sunset, Frankfurt am Main, S. 24.

て埋葬されるが、そこはやってきたかった場所ではなく、死にたかった場所ではなく、次の旅を待つところであり、つねに場違いのところであった」。²こうしたオスカー・マリア・グラーフの例は、亡命作家の問題を考える場合、稀少な例に属するのではなく、ひとつの典型として、普遍的に潜んでいる問題と考えてもよいだろう。では、カリフォルニアに亡命した作家にはどのような特徴があったのか。

3. サナリー・シュル・メール——ドイツ文学の首都——

ナチス時代の亡命文学を語る場合、1933年5月10日の焚書の日、多くの作家に国外脱出を促したという意味で重要な転機となった日である。ドイツ精神を焼き殺すことにもなった焚書であり、この日を境に焚書にされた作家が、みずからの生活の存続を断念し、財産のすべてを放擲し、その書庫を没収され、着のみ着のままで夜行列車に乗りドイツの国境を越えた。ここに至るまでは、大方の作家はナチスの蛮行も長くは続くまいと楽観視する見方が一般的であったが、政権の奪取、それに続く焚書を機に脱出を決意した。ひとまず、パリ、南仏、ロンドンに逃げ延びるのが通常のルートであった。

さてリオン・フォイヒトヴァンガーの場合、カリフォルニアに亡命するまでも、紆余曲折を経た逃避行があり、避難場所も転々とすることになる。1933年、フォイヒトヴァンガーがアメリカでの講演旅行中の1月30日、ヒトラーが政権を奪取した報がアメリカのドイツ大使館にも届き、フォイヒトヴァンガーにも知らされた。アメリカ大使のブリットヴィッツがフォイヒトヴァンガーにドイツへの帰国を断念させたことにより、事実上フォイヒトヴァンガーの25年にわたる亡命生活が始まることになった。ワシントン滞in時には同行していなかった妻マルタとは、オーストリアのSt.アントンで合流し、スイスに逃げのび、パリを経由して南仏のサナリー・シュル・メールに移住先を求めた。1933年8月23日にフォイヒトヴァンガーの国籍と博士号は剥奪され、ベルリンの住居、財産は差し押さえられた。

フランスのリビエラと言われたサナリーが他の亡命地と比べ特徴的なことは、フォイヒトヴァンガーのベルリン時代を遙かに凌ぐ多くの作家、芸術家が結集し、文学サロンとして機能していたことである。その中心にいたマン兄弟、フランツ・ヴェルフェル、カントロヴィッツ、アルノルト・ツヴァイク、ヴァルター・ハーゼンクレーヴァーなどが「ドイツ文学の首都」を築くことになった。サナリーの時代をふり返り、フォイヒトヴァンガーは『フランスの悪魔』でこう述べ

る。

「私は地中海のフランス海岸での7年間におよぶ滞在の期間に風光明媚、陽気な生活をあらゆる意味で享受していた。（略）そして小さな丘を登ってわが太陽を浴びた白亜の家に着き、わが庭を静寂のなかでふたたび眺め、わが大きな、明るい書齋を、その前に広がる海を眺め、（略）わが美しい書物をふたたび手にとると、わが存在のすべてとともにこう感じるのだ。ここにきみは属しているのだ、これがきみの世界だ」。（S17）³

フォイヒトヴァンガーにとって南仏での執筆生活は2万冊を越える文献図書を備えることによって、『オPPERマン兄弟』、『息子たち』、『不実のネロ』、『亡命』、『ヨーゼフ』などを上梓する豊穡な時代となった。ドイツの文学界で絶対的な影響力をもち、ベストセラー作家として出版界にも影響力のあったフォイヒトヴァンガーからすれば、いずれ故国に帰ることは視野に入っていたわけである。しかし同時に、フォイヒトヴァンガーは、ナチスは戦争を意味していることをたえず警告し、ナチスへの抵抗を支援し、みずからもドイツ国内にメッセージを送り続けた。

「いったい、私をフランスに留まらせた理由は何であったのだろうか。それは例えばこういうことである。1933年から私は、ヒトラーは戦争を意味している、戦争なくしてはナチスを追い払えない、と公に宣言してきた。（略）私は最後にはドイツに数百万人の読者をもち、いまだに当地で多くの人間が私の言葉を聞き、危険を顧みずに、まだなお多くの人間がドイツから使者を私のところに送り、忠告を求めている」。（S19）

後述するようにフォイヒトヴァンガーとトーマス・マンはこの南仏で、ともに国籍を剥奪された立場で、その後の身の振り方を考えながら、7年間の南仏時代を過ごすことになる。まだカリフォルニア亡命など眼中にはない、暗中模索の時期のことである。1933年の春、まだトーマス・マンが南仏のバンドル、サナリーでどこに居を定めるべきか迷っていた時期に、フォイヒトヴァンガー夫妻とは頻繁に会い、ドイツに関する情報交換に忙しい日々を送っている。「きのう、私

3 Lion Feuchtwanger: Der Teufel in Frankreich Erlebnisse, Tagebuch 1940, Briefe, Berlin und Weimar, 2., erweiterte Auflage 1992, S. 17. Mit einem ergänzenden Bericht von Marta Feuchtwanger, Nachwort von Hans Dahlke. Anmerkungen und Textredaktion des Tagebuchs Harold von Hofe. 以下、ページ数のみ記載。

たちはハインリヒとともにフォイヒトヴァンガー家でお茶を飲んで、現政権がどのくらい続くのかいろいろな面から議論した」(トーマス・マン日記、1933年7月6日、木曜日)

そしてナチスのフランス占領時代が始まる1940年に入ると、フォイヒトヴァンガーは、レミル・ユダヤ人収容所に収監され、釈放されるまでの顛末を『フランスの悪魔』で詳述し、そのなかで仏政府の官僚主義をこう説明する。

「国内騒乱、戦争や外国軍隊の占領などに国家が振りまわされることのなかった人には、身分証明書や行政機関の公的スタンプが人生で果たし得る重大性を理解できまい。(略)だが、そんなスタンプをもらうために必死に駆けずりまわる何万人、何十万、いやおそらく何百万もの人たちがいた。何千という人がこの許可を得るために、どれほど多くの申請者リスト、金銭、忍耐が費やされたことか！(略)どれほど多くの詐欺師が、それらを必要とする人たちからこの種のスタンプや身分証明書を不法に手に入れることで生計をたてていたことか。合法的にせよ非合法的にせよ、この種の文書の取得をめぐる、多くの幸福と不幸があった」。(S. 89f)

フォイヒトヴァンガーは、1940年5月21日から1か月間、強制労働に従事したレミル収容所から、指示に従い次の収容所に向けて出発することになる。「とうとう司令官が、列車は明日6月22日午前11時にレミルの駅を出発すると、掲示で通告した」。(S. 134) 列車の行き先は不明、列車は待機状態、すべては未定の状態となり、たえず次を待つという亡命者特有の極めて不安定な心理状態におかれる。「列車はおそろしいほどにゆっくりと進み、アルル駅を越えると、野外の待避線に停車した」(S. 147) というように、停車と進行を繰り返しながら、6月23日は「われわれの列車はピレネーに沿って走った」。(S. 153) 6月24日は「フランス最南部の大西洋の港であるバイヨンヌ市に向かって走った」。「バイヨンヌの中央駅で長いこと停車する」。(S. 155) 最終的に、レミルにもどらずにニームに向かい、6月26日にニームでフォイヒトヴァンガーは、独仏休戦協定締結の報を知り、脱出を決意することになる。運よく偶然にスペインのピレネー山脈を越えてリスボンにたどり着いた夫妻は、希望の地、約束の地アメリカに向けて出航することになる。

4. フォイヒトヴァンガーのアメリカ入国

マーガリン工場主の息子ですでに戯曲で名を馳せていたリオン・フォイヒトヴァンガーと製糸

工場の支配人の息子で21歳のベルトルト・ブレヒトが1919年にミュンヘンで出会って以来、ふたりはモスクワの雑誌「言葉」の共同編集人となり、また『シモーヌ・マシャルの幻覚』などの三作品における共作者という関係にあった。ミュンヘン時代から師弟関係であると同時に菌に衣着せぬ関係で知られ、ブレヒトからすると年長の友人という間柄であった。

フォイトヴァンガーは、1941年2月にカリフォルニアに移住し1943年4月からはPaseo Miramar 520番地の、太平洋を眺望できるメキシコ風のVilla Auroraを再建し、パシフィック・パリセイズで終生にわたる亡命生活を送ることになる。

一方ブレヒトはストックホルム、ヘルシンキ、モスクワ、ウラジオストックを経由して、1941年7月21日、ロサンジェルスサン・ペドロ港に入航し、棧橋にはフォイトヴァンガーの妻マルタ、俳優のアレクサンダー・グラナハが迎えにきていた。ブレヒトはすでに到着した翌日の7月22日の日誌に、フォイトヴァンガーがブレヒトにカリフォルニアに住むように勧めた旨のことを書いている。こうして始まったカリフォルニアの生活はブレヒトには適応するにむずかしく、気候、風土、食事のどれをとっても満足のいくものではなく、仮寓に住んでいるという感覚であった。またブレヒトの英語の運用能力も十分とは言えず読みはできたが、1944年になっても発話能力が身についた程度であった。そして、到着してすぐにブレヒトはFBIの監視下におかれ、1947年10月30日に非米活動委員会の公聴会に召還されることになり、尋問に答えた翌日にはチューリヒに向けて、ニューヨークを後にした。

5. パシフィック・パリセイズ

パシフィック・パリセイズは、ロサンジェルスダウンタウンから車で40分ほどの、サンタ・モニカの北隣に位置する風光明媚な住宅地であり、主に1920年代に開発と発展が繰り返された結果、太平洋を望む住宅群が開発された。ナチスから追放されたドイツ、オーストリア、チェコスロヴァキアの亡命作家、芸術家、思想家、作曲家、映画監督、台本作家、俳優などが大挙してパシフィック・パリセイズに押し寄せ、太平洋岸のヴァイマルと呼ばれるほどのドイツ文化圏を築いた。そしてこの亡命地、避難場所ではドイツ文化が百花繚乱の様相を呈し、アメリカ国内で成功したわずかな文学者、ハリウッドで成功した多くの監督、俳優たちが散歩の傍らに寄りあい、パーティで集うサロン社会を形成していた。ホルクハイマーとアドルノは『啓蒙の弁証法』を、トーマス・マンは『ファウストゥス博士』を執筆し、ベルトルト・ブレヒトは改稿版『ガリレイ

の生涯』の上演をチャールズ・ロートンとともに試み、フリッツ・ラングは「死刑執行人もまた死す」を制作した。フォイヒトヴァンガーはベストセラー作家として、『フランスの悪魔』、『ラウテンザック兄弟』、『ゴヤ』、『トレド風雲録』、『アメリカのための武器』などの作品を発表し続けた。そしてチャップリンもフォイヒトヴァンガー邸のパーティの常連であり、モーディックはかつての避難所としての役割、サロンとしての機能、そして戦後の役割喪失をこう描写している。

「そう、この家は、西側世界の最果てで多くの人のために隠れ家、サロン、仕事場になった。来客名簿の多くは名前、日付、詩句、感謝の言葉、スケッチなどでびっしりと埋まっていた。しかしゆっくりと、忍び寄るように、家は静かになっていき、人の気配はなくなり、冷気がただよっていた。ひょっとして今となってはマルタとかれには大きすぎるのかもしれない。（略）友人や亡命の仲間とはとくにヨーロッパにもどった。ブレヒト、アイスラー、チャップリン。トーマス・マン、デーブリン。または死去したハインリヒ・マン、フランツ・ヴェルフエル。椰子の木の下で埋葬。そしてブレヒト。ベルリンの地で国葬」。⁴

ドイツ本国ではありえなかった隣り組みが誕生していたわけである。トーマス・マンとリオン・フォイヒトヴァンガーは、ドイツでは名前だけを知る関係であったが、パシフィック・パリセイズでは家族同士が交流を結ぶ関係となり、トーマス・マンがスイスに帰還しても書簡の往復は続き、二人の文学者は終生の友となっていく。20世紀のドイツ文学でもっとも多産で、多大な影響を及ぼした2人の文学者がたがいに、ドイツの戦況を見守りながらドイツへ向けて著作、亡命紙、ラジオ放送を通じて発信していたが、トーマス・マンにはドイツ国内からの反発が強かった。

トーマス・マンは1938年にニューヨークに入り、プリンストンに2年ほど滞在したあとの1941年に、カリフォルニアのパシフィック・パリセイズに移住する。はじめアデルフィ通りの借家に住み、つぎにサンレモ通りに自宅を構えてからもほぼ毎日のように、海岸通りのプロムナードを散歩するのが日課であった。これは南仏に避難していた時代も変わることなく続いていたトーマス・マンの習性であり、食習慣、家具、調度品にいたるまで、ミュンヘンの邸宅に住んでいた当時と変わらぬ生活様式を維持した。カリフォルニアの邸宅では庭師を入れ、コックを雇い、気に入らなければ即日解雇するという、じつに高踏的な生活を貫いたことになる。兄のハインリヒが清貧に甘んじた生活を強いられ、弟に無心しながら生活したのとは比較すべくもない優雅な日

4 K. Modick, *Sunset*, S. 169.

常であった。トーマス・マンのアメリカ亡命につきまとう喧しい批判、高みの見物的な態度にたいするドイツ本国の国内亡命派からの批判の根底には、亡命先アメリカでも翻訳作品には人気があり、印税収入に恵まれていたこと、ルーズベルト大統領とは昵懇のなかであること、なによりも潤沢な経済的な基盤があったことが挙げられよう。ドイツ国民から反発を買う刺激的な材料であふれていた。

6. フォイヒトヴァンガーと亡命紙「アウフバウ」の役割

フォイヒトヴァンガーがアメリカに到着した1940年代初頭のニューヨークには、ドイツ系ユダヤ人社会を中心にしたコミュニティが形成されており、ドイツ、東欧からの難民、亡命者の受け入れ先として知られていた。そのなかで、亡命者、移民の生活の指南役を果たしていたのが、「アウフバウ」紙であり、反ファシズム、反ナチズムの政治機関紙としても知られていた。

前述のグラーフと「アウフバウ」紙との結びつきは強く、1939年から1950年までの間に62編の記事を掲載し、文学、書評などと並んで反ファシズム、反ヒトラーの政治記事を多く掲載した。そしてナチスドイツがポーランドに侵攻し、大戦が勃発し、ナチスの宣伝と戦争宣伝がドイツの放送・新聞界を支配していた1939年、グラーフが書いた9月15日の記事「ナチスに抗するドイツ人！——暴君ヒトラーに妥協なき憎悪を！」はつぎのように始まる。

「ヒトラーが比類なき、良心の呵責のなさをもって新たな世界戦争を煽り立て、数十万人の戦争犠牲者を畜殺台に追いやっている今、反ファシズムのドイツ人亡命者によるあらゆる警告と予告が真実であることが証明された。この亡命者たちは無力であった。彼らはたいてい亡命した国々では忍耐するばかりであった。軽蔑され、嘲笑され、敵視された時代だった。ヒトラー政権の野蛮さから故郷を解放するために戦ったもっとも尊敬すべき闘士たちは政治的な無為を強いられたのだ。彼らがそのことで精神的に破滅したくなければ、第三帝国で苦悩しながら闘っている同胞のように、受け入れ国でも非合法で活動しなくてはならなかった。行動が当局の知るところとなれば、国外追放となったのだ。むしろかなりの人間は自殺を選んだ。少なからぬ人間が国から国へと追い立てられ、貧困、不幸、絶望にとり囲まれた」。⁵

「アウフバウ」紙は、アメリカ・ユダヤ人クラブ（American Jewish Club）を前身とする亡命

5 „Deutsche gegen Nazis“ In: Aufbau, 15. 9. 1939.

紙であり、1934年に創刊され、1938年のクラブ10周年を境に急速に発行部数を伸ばし、1945年には4万部に達した。ヨーロッパでの戦線拡大にともないアメリカへの亡命、移住を目指す難民が急増しはじめ、ニューヨークを拠点とする「アウフバウ」紙の役割も増していくことになる。とくに、反ナチズムの立場を明確にしなが、いかにアメリカの生活に適応していくかということにおいて「アウフバウ」紙の指南は亡命者にとって生活の拠り所となった。

このように1940年当時の「アウフバウ」紙には、ナチスによって国外に追放されたユダヤ人、ドイツ人の情報をアメリカの内外に知らせること、そして迫害の状況を同胞に知らせる役割があった。その意味で連日のごとくリスボンから到着する難民を乗せた船舶の情報、フランスに抑留されている同胞のリストを掲載することによって、信頼性の高い情報紙としての役割を果たしていた。

フォイヒトヴァンガーが「アウフバウ」紙の顧問欄に初めて登場したのは、1941年6月20日号である。ほかに顧問欄に名を連ねたのは、リヒャルト・ベア・ホフマン、アルベルト・アインシュタイン、ブルーノ・フランク、エーミール・ルートヴィヒ、トーマス・マンなどであり、ユダヤ人のラビ、ユダヤ人の知識人、作家、ドイツ人の作家によって構成されていた。

7. 「アウフバウ」紙とロサンジェルス

ニューヨークを拠点にして発展した「アウフバウ」紙は、全米に販路を拡大するためにロサンジェルス、シカゴに支部を設け、またアメリカ以外でもイスラエルを中心に購読者を増やしていった。この時期にロサンジェルスが「アウフバウ」紙の西海岸の拠点として選ばれたわけである。1941年9月には、「西海岸」(die Westküste)の欄が開設され、それにはカリフォルニアを中心とした亡命作家、映画関係者の求心力をこの雑誌に反映させようという意図があった。その意味でフォイヒトヴァンガーが果たした役割は大きく、ロサンジェルスにおけるユダヤ人の集会、文学者の集いには積極的に参加しただけでなく、フォイヒトヴァンガーの邸宅Villa Auroraには、フランツ・ヴェルフエル、ブルーノ・フランク、チャーリー・チャップリン、ルートヴィヒ・マルクーゼなどをはじめとして多くの文化人、知識人が招待され、講演会、朗読会、映写会が催されていた。

8. ふたたび敵性外国人となるフォイヒトヴァンガー

「アウフバウ」紙の1942年3月6日号では、西部防衛司令官のジョン・L・De・ウィットによって宣言された移動命令が紹介されているが、この命令は日系二世に対してだけでなく、ドイツ、イタリアの敵国人に対しても出され、国籍をもたない難民、亡命者には不安を与えただけでなく、とくに日系二世の場合は職業の手段を奪われることを意味していた。ドイツ人側にも適用されることになり、反ヒトラーの難民の間でも大いに不安をもたらしたことが紹介され、ロサンジェルス「ユダヤ人クラブ1933年」における緊急の対策委員会が催された旨が伝えられている。ルーズヴェルト大統領の「大統領令9066」(Executive Order 9066)が発令されたあとに、公聴会が1942年2月と3月に西海岸の4都市、サンフランシスコ、ポートランド、シアトル、ロサンジェルスで催された。

一方で3月13日号の「アウフバウ」紙は、フォイヒトヴァンガーの声明文を「リオン・フォイヒトヴァンガーの難民分類化に関する意見」と題して紹介し、この声明で活動の基盤が、反ナチズムのための文学活動、抗議活動にあることを述べる。

本紙はここに、難民の大半のため、ならびに自らのためにリオン・フォイヒトヴァンガーが「カリフォルニア調査委員会」で発表した声明の重要部分を公開するものである。

条例によれば私は敵性外国人として登録しなくてはならなかった。そして現在、私は敵性外国人として考えられているために、西ロサンジェルスから移動することに脅威を感じている。(略) 1922年から私はナチズムの広がり抗して戦ってきた。私はナチズムの興隆とナチズムによる市民への恐怖を扱った小説を多く書き、世界中の主要な批評記事、雑誌、新聞で反ナチの記事を書き、世界の都市で、反ナチの放送をしてきた。(略) ドイツの宣伝大臣の演説によれば、ナチ自身は私を敵性外国人としてみなしている。事実、1933年8月23日、ドイツ政府は公式に、私が他の20人の異質な人物とともにドイツ国籍を失った旨を伝えた。(略) 私は明確に敵性外国人として分類され、西ロサンジェルスの自宅から移動させられなくてはならないのだろうか。結論は、私の将来の仕事にとって否定的なものとなるだろう。数か月にわたって私は反ナチに関する小説を中断しなくてはならず、反ナチの映画のための活動計画はむだに終わるだろう。もしナチが私に対する措置について聞けば、喜ぶことはまちがいない。ほかの多くの人間、1933年以来合衆国に移住してきて、いまだにアメリカ国籍を獲得できていないドイツ人の大半は、おなじような状況にある。しかしながら、これら大半の人びとに共通しているのは、今日のドイツの政

6 Aufbau: 13. 3. 1942. Lion Feuchtwanger on the classification of the refugees.

治とはなんの関わりもないというだけでなく、現在のドイツ政府の国家的な敵であるということだ」。⁶

フォイヒトヴァンガーは、とくに夜8時以降の外出禁止令の解除を訴え、自らが国籍離脱者であり「敵性外国人」として認定されることが作家活動に不利益をもたらすと訴えると同時に、この措置が宣伝大臣ゲッベルスを利するものであり、ナチスから見れば好材料であると指摘し、痛烈に批判した。ルーズヴェルト大統領には反意を示すことはできないものの、反ファシズム、反ナチズムを訴えるフォイヒトヴァンガーの声明は、とくに戦時中であって、トーマス・マンのアメリカとの融和路線と比較すると際立っている。

この時期におけるフォイヒトヴァンガーの危機意識は、敵性外国人に対して西海岸に敷かれた制限をきっかけにしてとくに強まり、「アウフバウ」紙もそれに呼応するように「ニューヨークタイムズ」に書き送った書簡を転載している。とくにフォイヒトヴァンガーの危機意識はしばしば作家活動を続けることの困難さに逢着する。フォイヒトヴァンガーは焚書の日を想起して、自分が「敵性外国人」と見なされている亡命先のカリフォルニアでこのように書いている。

「数日のうちに、べつの作家の書物とともに私の著書も焚書にした日（5月10日＝筆者）がやってくる。焚書にされた作家にはここロサンジェルスに住んでいる者もあり、なかでもエーリヒ・マリア・レマルクと詩人のペルトルト・ブレヒトも住んでいて、ブレヒトにはアルヒバルト・マックレーシュが高い賞賛の言葉を送っている。私は、この焚書の日には親交のあるこの二人の作家と顔を合わせたかったが、残念ながらそれはかなわなかった。われわれは三人ともこの国の政府から「敵性外国人」とみなされている。われわれはたがいに自分の住居から5マイル以上離れて住んではならない。ロサンジェルス市は広大であり、われわれの住居は離れすぎたところにあるのだ。

この国の人ばかりではない多くの人が驚いていることは、まさしくわれわれこそが「敵」になっていることである。というのは多くの人間は反ナチのわれわれの数十年にわたる活動について知っているからだ。数百万の人びとがレマルクの『西部戦線異状なし』を読んだのだ、それが焚書になるまえに。そしてそのあとでも。ドイツのナチ敵対者の数千人はブレヒトの歌を歌ってきたし、なおも歌っている。ソビエトの軍隊はこの歌を歌いながらヒトラーに抗して出征した。ナチに抗したわが著書も多くの言語で数百万部頒布されている」。⁷

7 Aufbau: 15. 5. 1942. Ein offener Brief von Feuchtwanger an die „The New York Times“.

9. フォイヒトヴァンガーと翻訳、言語の問題

国籍を剥奪されたまま、アメリカでは敵性外国人として扱われたフォイヒトヴァンガーにとってさらに深刻な問題は、前述のグラーフ同様に亡命が長期化するに及び、母国語の運用能力の低下、言語感覚の鈍化という点にあった。アメリカ、そしてフォイヒトヴァンガー、トーマス・マンなどの亡命作家にとって共同の敵であるドイツのナチズムであった時期が過ぎて、アメリカが非米活動員会（HUAC）、赤狩りへと突き進んでいくと、事態は逆転して、亡命作家が敵性外国人として排除の対象となったわけである。アメリカ社会への適応の問題のむずかしさは、アメリカをとりまく状況の変化にあった。

フォイヒトヴァンガーはドイツ語で書く作家であると同時に、その作品が全世界で読まれているコスモポリタンの作家であった。したがってその亡命生活を経済的に支えたのは、翻訳された作品がもたらす印税であった。作家フォイヒトヴァンガーにとってことのほか問題であったのは、異国で暮らすうちにたえず変質していく母国語と疎遠になっていくことであった。日常の英語世界によってドイツ語自身の表現能力はむしろ衰え、母国語はいつしか古い世界のための時代遅れの言語のように響いていた。亡命作家の深刻な問題をモーディックはこう述べる。

「そしてなんといっても辛いのは、母国語の生き生きとした流れからひき裂かれていることである。言語はたえず変化し、生活に順応していく。かれはいま、23年前から亡命生活を送り、そしてこの23年間で生活は先に進み、老いていくほどに歳月はより早く過ぎていく。（略）新しい（単）語を聞いたり、読んだりするのは、まず外国語であった。いつでも、そしてなんでもかれは外国語の響きを耳にした。その響きは絶え間なくかれに強く迫り、かれ自身の表現能力をむしろ衰え、母国語の刃がこぼれ、時代遅れのように響かせる。かれにはときおり英語の言い回しに相当するドイツ語の単語が出てこないことがあった」。⁸

前述のクラウス・マンのように亡命者のなかには英語で書こうと試みた者もいたが、実際に成功した作家は皆無であった。外国語の学習は可能であるが、その言語の根源に達することは不可能であるという、無惨な結果に陥るのが常であった。

8 K. Modick, *Sunset*, S. 68

10. フォイヒトヴァンガーと帰国の問題

フォイヒトヴァンガーが死去した1958年は、すでにマッカーシー旋風の吹き荒れるアメリカにあって、彼の立場はその最期まで、国籍の申請も叶わず、だからといってアメリカを離れば再入国は認められない状況にあったことから察せられるように、ドイツへの帰国は現実性のないことであった。フォイヒトヴァンガーはドイツへの帰国を拒否し続けたわけだが、本国西ドイツでは『ソビエト紀行1937年』を発刊したために親ソ連派の作家として、戦後は東ドイツに近い作家とみなされた作家であり、退路は断たれていたといえよう。

「帰還などないのだ。ではどこに。大量虐殺者たちであふれている引き裂かれた国に帰るのか、そこには古参のナチ、荒れ狂った名ばかりの黨員たちもいれば、他方で想像力のない政党のボスであふれ、退廃した表現主義者のボスたちもいるのだ。いや、かれには亡命は帰還のない旅なのだ」。⁹ブレヒトとフォイヒトヴァンガーが最後に書簡を交わしたのは、ブレヒトの死去する2か月前のことであり、ブレヒトの訃報に接し、改めて帰還の可能性のないことを確認することになる。

（なお、この稿は、埼玉女子短期大学紀要に掲載された亡命作家関係の論文を大幅に改稿したものであることをお断りしておく。）

9 K. Modick, *Sunset*, S. 25.